



生野銀山お雇い外国人ジャン・フランソワ・コワ ニエと日仏交流

白井, 智子

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2015-03-25

(Date of Publication)

2026-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第6359号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1006359>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



論文要旨

氏名 白井 智子

専攻 文化関連専攻

指導教授氏名 遠田 勝 教授

論文題目

生野銀山お雇い外国人ジャン・フランソワ・コワニエと日仏交流

論文要旨

1868（明治元）年、長年の鎖国により制度・技術面で西欧諸国からの遅れを痛感した明治新政府は、殖産振興、富国強兵を基本政策として様々な分野に「お雇い外国人」を採用し、日本の近代化を推し進めた。中でも、資本の充実を目的として、鑄貨製造のために、幕府管轄であった鉱山を官行にし、鉱山開発に注力した。そこで、いち早く接收されたのが、生野銀山（現在の兵庫県朝来市）であった。政府は、徳川幕府により閉山されていた生野銀山を再開発することを計画し、1867（慶應 3）年より薩摩藩に雇用されて鹿児島に来ていたフランス人鉱山技師のジャン・フランソワ・コワニエを明治政府お雇い外国人第 1 号として採用した。コワニエは 10 年間生野で鉱山開発に従事し、生野銀山の近代化を進めた。

コワニエに関する研究は、従来、日本に現存する限られた史料や二次資料に基づいて行われてきた。そのため、部分的で不確かな内容も多々みられた。論者は、日仏両国で、新資料の発掘ならびにコワニエ所縁の地での聴取、当時の関係史料や古文書、戸籍関係資料の調査を行い、入手した資料と情報をもとに、コワニエの全体像の検証を試みた。その結果、コワニエの生きた姿と功績の全体像が見えてきた。コワニエが残した業績は、日本の鉱山業の近代化だけに止まらず、広範囲にわたっていた。

コワニエはまず生野において西洋の最新技術と専門的知識を駆使し、政府を熱心に説き伏せて大規模な機械類を導入し、鉱産物掘量と収益を飛躍的に増大させた。さらに物資輸送の新道路建設によって物流を改革した。同時に、将来日本人だけで鉱山運営できること

を目的として日本最初の鉱山学校を創設し、人材教育・育成にも尽力した。

コワニエの采配によって、生野には通算 23 名のお雇いフランス人が明治 14 年まで勤務していた。この中には鉱山に直接関係の無い医師もいた。フランス人医師は、怪我や病気から坑夫たちを守っただけでなく、地元の人達に西洋医学を伝授した。また、技師であったコワニエの義弟は、大量の物資輸送のために、生野―飾磨港（姫路）間の日本最初の産業高速道路である馬車道を設計した。それまでの牛車運搬用の狭隘な道路から飛躍的に改善され、高速・大量の運搬が可能になった。この道は、当時の日本の地図や教科書に描かれた他、フランスの新聞や百科事典において紹介されるほど脚光を浴びていた。この他、コワニエの生野就任 2 年目に開設した「生野鉱山学校」には全国の藩から若い学生が集った。ここから卒業生十数名が世に出たが、それぞれ自藩に戻り、自藩の鉱山運営に尽くした。その中でも高島北海と広瀬幸平は、コワニエから大きな影響を受けた。

コワニエからフランス語や地質学を学んだ高島は、コワニエと共に国内の鉱山を視察し、日本初の広域地質図を作成した他、馬車道建築時に通訳の任を果たした。後に、生野での業績を買われ、政府の命を受けフランス、ナンシー森林学校に留学する。留学中、出会ったナンシー派の芸術家らに日本でコワニエらお雇いフランス人から習得した地質学や植物学も応用した、独自の日本画を披露した。これがジャポニズムの影響を与えることになり、流行の兆しを見せたアール・ヌーヴォーを開花させた。この他、日本の植物や日本庭園を現地の雑誌で紹介し、フランスの植物・園芸界にも影響を与えていた。フランスでは、帰国後のコワニエらお雇いフランス人と再会も果たしていた。

後に住友の総支配人となった広瀬は、銅山の経営に悩んでいた政府や住友の要請により 2 度生野に出仕し、自ら坑内に入って熱心に最新の西洋の鉱山技術を学んだ。また、コワニエを別子に招聘し、受けた助言を別子銅山に応用した。広瀬は、生野銀山を、近代化の模範鉱山マザーマインとみなし、生野に倣って西洋機械や技術を導入した他、馬車道建設やお雇いフランス人の雇用も実施し、別子銅山の近代化へと導いた。コワニエは日本の近代資本主義の発達の重要な側面に関与していたのである。

コワニエは、別子の他、阿仁銅山、院内銀山、半田銀山など官営・民営を問わず依頼を受けて、日本の鉱山の視察に回り、技術指導にあたった。日本の鉱山に関する報告書をフランスの専門誌に寄稿していた。さらに、義弟らとともにフランスの植物・園芸雑誌に日本の植物や果実を紹介していたこともわかった。

以上のように、論者は、日本とフランス双方の既出資料および新出資料を用いて、公文

書の記録の裏付けや記述内容の過ちの修正をすると共に、コワニエが日本の生野銀山の近代化に果たした多方面にわたる業績と足跡を解明した。さらに鉱山以外の分野―植物、園芸、教科書、地図などの史料を精査することにより、従来知り得なかった別の側面を知ることができた。

本論は、生野銀山史や日仏交流史の他、さまざまな研究分野にも新たなページの追加と従来説の修正を可能とするものと考えられる。